

Original Science Fiction From China

中国 科学幻想小说 事始

童恩正 鄭文光 葉永烈 著
池上正治 訳

工业学院图书馆
藏书章

池上正治 (いけがみ・しょうじ)

- 1946年 新潟県生まれ
1970年 東京外国語大学中国科卒業
現 在 著述・翻訳業
著 書 中国旅行全書 (刊々堂, 1980)
西域縦断歌日記 (平河出版社, 1988)
グローバル中国 (スリーエーネットワーク, 1989)
北京暗転 (平河出版社, 1989) 等
訳 書 針刺麻酔 (共訳, 東方出版, 1974)
針灸学 (共訳, 刊々堂, 1977)
針灸臨床の理論と実際 (国書刊行会, 1988)
四部医典タンカ全集 (近刊) 等

中国科学幻想小説事始

1990年3月31日初版第1刷発行

著 者 池上正治

発行者 澁澤 賛

印刷 榊神谷印刷／住友出版印刷

製本 栄久堂

発行所 (株)イザラ書房

〒113 東京都文京区本郷2-26-8

TEL. 03-817-0579

振替 東京0-148025

中国科学幻想小説事始 ● 目次

I	岡村昭彦を悼む	池上正治	5
II	現実・予測・幻想	饒忠華・林耀探	11
III	人文科学と自然科学を結ぶ橋	王逢振	33
IV	科学小説『月世界旅行』弁言	魯迅	59
V	雪山魔笛	童恩正	65
VI	太平洋人	鄭文光	103
VII	飛べ、冥王星へ「映画シナリオ」	葉永烈・溫汴京	167
解説にかえて		池上正治	239／中国SF年表 244

注記は、各章ごとに末尾にまとめたが、本文中、原著者による注記は★で、訳者による注記は☆で対応を示した。

装丁 井上則人

中国科学幻想小说事始

岡村昭彦に捧げる。

I

岡村昭彦を悼む

——まえがきにかえて——

池上正治

一九八〇年九月二十日——埼玉県日高町。「ベトナム戦争からDNAへ」というテーマのセミナーが、二日間にわたって開かれた。講師のあなたは、カーキ色のリュックサックいっぱい資料を次次に取り出しながら、やや淡々とした調子で話した。ベトナム戦争の終結を機に、アメリカ社会では大きな変化が静かに進行していること、それまでの指導的役割を演じてきたアパークラスは、すっかりミドルクラスにくわれてしまったこと、学問の世界では、生命を主軸に据えてすべての知識を再構築しようとする試みが始められていること、その名をバイオエシックスということ、SFというフィクションについての理解の幅が広まり、大学の講義にもSFが取り上げられていること、生命および死の探究への手がかりとして、義務教育レベルから死とは何かという授業がおこなわれていること……いずれも新鮮な内容であり、参加した二十人ほどの若者は大きな感銘を受けた。

最初のもの静かな口調は、しだいに熱気を帯びてきた。話し手から聞き手へ、質問の矢が浴びせられた。感動した若者たちは、一瞬、たじろいでしまった。ゼミの呼びかけ人である笹崎兄弟から、夜を徹しての本格的なゼミであり、それぞれの持つ考え方をぶつけ合うものにしたということは、前もって知らされていたはずだ。しかし、ベトナム戦争以降のアメリカの様変わり、バイオエシックスなどという耳新しいキーワードで聞かされた直後では、質問すらも出てこない。あなたは、それを許しておくような人ではありませんでした。

作戦タイムが与えられた。参加者たちに、自分の個人史を中心にして話すよう、話し手から希望が出された。自己紹介ならば、だれでもできるというものだ。それまで貝のように黙っていた若者たちも、少しずつ話しはじめた。そしてこの自己紹介は次の質問への布石であることを、あとで知った。個人史の内容から推測して、本人が知っている可能性のあること、あるいは知っているべきことについて、具体的な質問の矢が放たれる。

「中国のSFはどうなの。歴史的には？」と聞かれて、すっかり困ってしまった。古いことでは、『西遊記』などもSFに数えられるかもしれないが、最近の雑誌には「科学幻想小説」というSFらしいものときおり出ていること、それらは実はあまり面白くないこと、ジュール・ヴェルヌの作品は日本留学時代の魯迅によってすでに中国語になっていることなどを、苦しいながらも、答える。「面白いとはどういうこと」……折り返しの質問である。いつしか、話し手と参加者のあいだにあった心理上の垣根は取りはらわれた。緊張感のある、レスポンススタイムのない会話がつつく。

時間は、昼から夜へ、深夜から早朝へと移り、場所も、会議室からホールへ、桑畑の農道へと変わる。しかし、ゼミはつづいた。話しながら農道を行き、雑木林を抜けると、そこは笹崎兄弟の父が経営する種畜養豚場だ。ぶっつけ二日のゼミの打ち上げとして、トンギスカンパーティが用意されていた。見上げるような松の木のもとで、皆はよく食べた。豈一枚ほどもある厚い鉄板の上の豚肉と野菜は次々と焼かれ、次々と胃袋におさまった。

一九八一年八月一日——中国、北京。一年前のゼミでの出会いは、予想外の進展を遂げた。岡村さんは「勉強したので」と、魯迅の会に入会してくれた。あなたは、死の危険のあるベトナム戦争の取材に、『魯迅選集』を持っていった人。わずか三冊の日本語の本の一冊として。平和をむさぼる日本で魯迅を読む人間とは、気構えが違はず。その研究熱心には頭の下がる思いだった。そこで、無理にお願いして、魯迅の会訪中団の団長になってもらった。

それまでの魯迅の会訪中団は、魯迅のゆかりの場所を訪ねたり、研究者と会ったりすることが主目的であった。今回は、少し違った。SF作家である鄭文光さんオウゴンエンクワンと話すことができた。しかも、中国のSF翻訳史と魯迅とのかかわりを考えるならば、これは新しいテーマでもある。静岡県舞阪にある、浜名湖をのぞむ岡村さんの書斎の膨大なSFのコレクションを思い出しながら、「中国のSFはどうなの」という問いをかみしめた。

訪中団の参加者十七名にとっても、魯迅vsSFという話題は十分に新鮮だったようだ。北京、西

安、南京、そして上海と旅程が進むにつれて、SF作家と会う機会も多くなり、同年代とおぼしき若い女性作家も現れる。それらの作家や作品の解説のために、ない知恵をしばって冷や汗をかく人間とは対照的に、岡村さんのSF論は冴えわたってきた。

フランケンシュタインからロボット、タイムマシンからスターウォーズというSF的発想は、狩猟→農業→工業↓？へと主要な産業構造を転換させながら変化していく人間にとって、欠くことのできない思考上の手法であること、人類の四分の一を占める中国が農業から工業へと転換しようとしている現在、友情をこめてSFについて語り合うことの重要性、四つの現代化を記念して発行された切手の一枚にDNAのモデルが印刷されていることの意義などを、夜のふけるのも忘れて、熱弁をふるってくれた岡村さん。

あなたの発想のスケールには圧倒されました。これまで約二十年、中国語や中国文学をかじってきましたが、たとえばSFをひとつの手法として、未来を洞察するなどということ、だれも教えてくれませんでした、このグローバルな視野の展開というものを。もうひとつ、「川だよ、この大陸を知る決め手は」というヒントも、大切にしておきます。ベトナム戦争の硝煙のなから、アメリカを突きぬけ、アイルランドに居を定めた、フォトジャーナリストの教えとして、深く心に刻んでおきます。

●
それにしても、昭彦さん、あなたは早く逝いってしまいました。どうして、そんなに生き急ぐこと

があつたのですか。去る三月二十三日の夜、訃報に接したのも、北京でのことでした。とりあえず、鄭文光さんや王逢^{ワフオンチン}振さんなど、SFを通じて知り合つた作家や研究者に、そのことを知らせ、弔文を一枚書き上げるのが精いっぱいでした。

いま、あらためて、中国のSFの作品やカードを机の上に広げて、ぼんやりとしています。厚さ十センチほどにたまつた「中国SFカード」を前に、「うん、これは便利だ。あとはサマリーだな」と目を細めたあなたが、まだ、ここにいるかのようです。未完のままのカード作りですが、けつして無駄にはしないつもりです。一回きりの人生で、あなたとたまたま遭遇した若者たちは（人生にたまたまなどという偶然があるものか、ときつとあなたは怒るでしょう）、それぞれの持ち場で、各自の仕事をつづけていきます。どんな芽が出て、どんな花が咲くか、少しばかり、気長に見守ってください。

さようなら、昭彦さん。

一九八五年七月十五日

II

現実・予測・幻想

——『科学神話』序にかえて——

饒忠華・林耀探

歴史を大ざっぱに考えてみることは、非常に興味深いことである。

地球上に生命が誕生し、変遷を経て、高等生物に至るまで、数十億年が経過している。霊長類という枝は三千〇四千年の進化を経て、直立行動ができるようになった。いまから約二百〇三百万年前、道具を作ることを覚えた人類は、文化の時期にはいった。石器時代から、記録をもつような文明の時期まで、数十万年が経過している。この文明の時期がさらに数千年の歴史を経て、ようやく近代技術の時期にはいった。現代科学の時期にはいったのは、二百〇三百年前のことにすぎない。

宇宙飛行を指標とする宇宙文明の時代には、目下、二十〇三十年の歴史しかない。

このように考えてくると、時間の関係を次のように整理することできる。生命の進化の歴史は億年単位であり、知恵をもった生命が変化して人類になる歴史は千万年単位であり、人類が文化の時

期にはいった歴史は百万年単位であり、文明の時期にはいった歴史は十万年単位であり、近代技術の時期にはいった歴史は千年単位であり、現代科学の時期にはいった歴史は百年単位であり、宇宙文明の発展は十年単位である。そうだとするならば、文明の歴史は十倍ないし百倍のスピードで前進、発展している、と結論することができると。だから、次のように考えることができよう。人類は未来に向かつての途中にあり、科学技術の発展に伴い、ある段階から次の段階へと進むのに要する時間は、しだいに短くなるであろう、と。未来に対する憧憬と思慕が、これまで人類の文化を發展させた精神的な原動力であると仮定するならば、しだいに加速して發展する現実を目の当たりにするとき、人類はさらに豊かな想像力を必要とすることになる。そうしてこそ、無数の未知の領域を開拓し、さらに輝かしい科学文化を創造することができるのである。

現実とは想像の出発点である。今日の現実が人の行動を誘うのであり、古代の驚くべき神話はすでに一般的な事実となっている。月に奔った嫦娥^{じやうが}、天空を大いに騒がした孫悟空^{さくわく}は、いずれも美しい神話であると同時に、自然を征服しようという古代人の高度な想像でもある。現在、人類は月に行くという夢を果たしただけでなく、太陽系の地球以外の惑星に観測機を打ち上げている。「旅行者」の観測機は一九八六年には天王星に、一九九〇年には冥王星に接近し、その後は太陽系の外に飛び出すであろう。地球以外の文明社会と知恵をもった生物——宇宙人を探し出すことは、古代人の想像だにしなかった壮挙であるが、今日では科学界の当面する課題になった。神話中の人物は、せいぜい海底の龍宮に何回か遊んだだけであるが、現在の人類の技術は古代人の想像力も及ばな

った大洋の深部にまで達している。「アルキメデス号」は世界で最も深い海底に潜水した。一万メートル以上の深部で、科学者たちは太陽の神秘をすっかり観察し、視力の完全に退化した白い魚や数々の珍しい光景を目撃しただけでなく、マジックハンドによって海底の岩石見本を採集した。事実上、地質学者や地球物理学者が陸上でしたことを、海洋学者は海底で始めたのである。

今日の人類がもつ自然についての知識は、古代人の神話による想像を超えている。これは科学文明が発展した必然の結果である。マイクロの世界では、百億光年の宇宙空間が観測されており、宇宙の変遷の秘密を解く探索が始められている。マイクロの世界では、古代ギリシャの大まかな原子論は、後世の人々の具体的な実験によって、突破されてしまった。人類は原子の細かな構造を明らかにしただけでなく、マイクロの世界に一步一步と深くはいり、基本粒子の実相が明らかにされる日も近いであろう。かつての神話の想像をさらに超える奇跡が、現実から次へと起こりつつある。遺伝をめぐる秘密の解明、人工的な設計、基因の再組織の実現は、人々の最大限の興味を引き、人工生物の出現が期待されている。人類自身についての研究もすでに始められている。科学技術の手段によって自然の進化に関与し、人類自身を改造して、人間の作業効率を高めることは、私たちの現実のなかで最もすばらしいことになるであろう。

現実の基礎に立った未来予測は、さらに人の心を動かすことになる。そのような一例をあげるだけで、十分であろう。一九六一年、米国は「十年以内に人間を月に送る」ことを公式に表明し、六九年にはアポロ計画を実現させたのである。昨日の科学的予測は、今日にも実現される確実な予告